

厳しい時代が 六斎を支えた

実力者のみが舞台上に上がる厳しい時代



山田均氏・永田文哉氏・西村一孔氏・木村俊典氏 / 聞き手：清水美優・西片里紗

当時の厳しい稽古が伝統の重みを感じさせてくれるエピソードをお聞きした。

インタビュー収録／2012年2月11日（土）13:00-16:00 吉祥院六斎歴史資料展示室にて

美優 お忙しい中、ありがとうございます。

今日は、これまで吉祥院六斎念仏踊りを受け継いで来られた方々から、六斎の思い出などについてお伺いいたします。宜しくお願いたします。

六斎歴史研究会が発行する会報「獅子の如く」が毎年2回（4月25日・8月25日）発刊しています。これまでの会報を編集した創刊号を発刊する予定です。今日のインタビューも掲載し、吉祥院六斎の歴史資料として記録したいと考えています。今日はどうぞ宜しくお願いします。

里紗 早速ですが、山田均さんにお伺いします。何歳で六斎に入会されたのですか。また入会した切っ掛けは何でしたか。

山田 16歳の時に地元の友達に誘われて3名で入会しました。

里紗 昔は実力のある人だけが舞台上に上がれるという厳しい時代があったとお聞きしましたが、舞台上に上がるために随分稽古をされた

と思いますが、吉祥院天満宮の舞台上に上がるに何年ぐらいかかりましたか。

山田 16歳で入会して半年ぐらいで天満宮の舞台上に上がりました。私だけが（太鼓）選ばれて、大阪のNHKのテレビにも出演しました。

美優 なぜ山田さんだけが選ばれたのですか。

山田 たまたま太鼓を叩くのがまじやったんでしょね。

里紗 山田さんは太鼓や笛の他、岩見重太郎などを担当されていましたが、特に難しかったのは何でしたか。

山田 やっぱり笛ですかね。入会して1ヶ月間は練習で聞き覚えて、その後、当時は、あちこちと出演する機会が多かったので、実戦で聞き覚えてしまったんやろうね。見よう見まねで吹けるようになったと思います。はじめの頃は、太鼓や岩見重太郎や和唐内とかもやりました。祇園囃子もやったな。当時は吉祥院だけでも8組の六斎組があったけど、笛が難しく吹く人が育たない。そのため笛はもの凄く教えられましたね。

里紗 最近、山田さんの息子さんの公亮さん（28歳）が笛を吹かれています。やっぱり笛を教えられたのですか？

山田 いや何も教えてない。六斎の昔の画像を残すために、VHFテープからDVDにダビングするのを息子に頼んでいて、その画像を見ているうちに自然と笛が吹けるようになったようです。これも聞き覚えやと思う。強制して教えても無理やね。聞き覚えるということは、



笛：山田公亮／山田均

自分自身が興味があってこそ聞いて覚える。又、上手な人がいないと聞き覚えは出来ないし、特に早い曲がついていけない。祇園囃子などゆっくりした曲はついていけるけどね。DVDにダビング中何回も聞いているうちに吹けるようになったみたいやな。私もびっくりしてます。

美優 公亮さんは太鼓はやらないのですか。

山田 太鼓はやってないな。やれと強制したこともないね。親父が^{オヤジ}笛やっているから自然と聞き覚えて、興味が出てきたんと違うかな。でも笛をやってくれて助かってるけどね。

里紗 これから六斎の保存活動には、どんなことが必要だと思われませんか。

山田 やっぱり後継者の育成ですね。今は四ツ太鼓しか練習していない。次は祇園囃子の練習するとか次の段階に進みたい。練習することで自然と聞き覚えられるので、練習も意識的にやるのが大事やと思います。

美優 子どもたちから山田さんたち大人からもっと教えて欲しいという声がありますが。

山田 私も出来る限り練習に参加してますが、六斎は楽譜が無いので、曲を聞いて自らやる気のある子どもは、自然と聞き覚えも早いし、その子は上手になるわね。

美優 NPO法人ふれあい吉祥院ネットワークで「六斎のまち吉祥院」というキーワードでまちづくりに取り組んでいただいています。NPOや地域の人たちには、どのような取り組みの支援をして欲しいと思いますか？

山田 これまでは、独自独断で菅原組の六斎を守って来たけども、今は単独では保存できない状況です。石田さんや色々な方々が支援していただいて、保存活動が広めていただいているのは本当にありがたいと思っています。上久世学区の六斎保存会は、一時消滅しかけたけど、小学校が「子ども六斎クラブ」として取り組み、後継者を育てて、復活した例もあるので、ぜひ吉祥院小学校とか洛南中学校で地域の文化財を伝える取り組みをして欲しいです。六斎保存会の会員も高齢ですので、教えられない時が来ると思います。教えられるのは今がチャンスやと思います。

美優 私たちは4月から大学に進学しますが、私も里紗も今は笛と太鼓しか出来ないけど、

これからは祇園囃子とかその他也練習したいと思います。

山田 特に白ハリ太鼓の相打ちは難しいよ。打ち方（叩き方）に表と裏があって、裏の打ち方が難しい。手が軽い（上手な人）人でないと駄目やしね。表の打ち方は自分のペースで打てるけど、裏は表の後を追って行くので非常に高度な技術が必要になります。常に相棒と稽古して呼吸を合わせる必要があります。そのため子ども六斎と大人の保存会の練習日が別々にやるのではなく、一緒に練習することで、子どもたちも聞き覚えで上手になると思う。昔は練習より出演機会が多く、東京の武道館や国立劇場、筑波博覧会などに出演する中で緊張感を持って覚えられた時代があったけど、今はそのような機会も少なくなったし、やっぱり合同で稽古するのはいいと思うな。中でも獅子は舞台を経験することで、生きた獅子をどう演じるかが勉強になるしね。衣装や獅子頭の重みもあって、今までやった中で一番きつかったんは獅子やな。獅子をやった者しかその大変さがわからない。

美優 今30歳の木村信彦さんと村田大輔さんの二人のお兄ちゃんたちがやっていますが。

山田 そやな本間によくやってくれてる。もしあの二人がいなかったら六斎の火は消えてたな。獅子頭や衣装は重たいし汗臭い。汗で衣装がかなり重くなって倍近く重みを感じる。その状況で獅子を演じなきゃいけない。獅子頭のあごをお客さんに見せると生きた獅子に見えないので、獅子頭のあごをきゅっと引いて躍動感のある獅子を演じる必要がある。かなりしんどい芸なので、なかなか後継者も育ちにくい。昔は、町内の地蔵盆でも獅子をやってたしね。私らの小さい頃はよく見に行ったりして、そこで六斎に誘われたりしたしね。

美優 山田さんは、六斎保存会に入会してから何年になりますか。

山田 そうやね50年近くになるんかな。昔は上手な人だけが舞台に上られる厳しい時代があって、実力のある者が選ばれてたし、お手本になる人がいっぱいいたからね。器用な人が多かった。それを見て育ったので何でも出来るようになったと思います。笛や太鼓、

鉦、獅子、和唐内など色んな芸が出来る人が多かった。今は後継者を育てる意味で、上手な人だけを舞台に上げるのではなく、経験させる意味もあって、舞台や遠征に連れて行きますけどね。六斎をやっていたお陰で日本武道館や国立劇場、NHKにも出演することが出来たし、色々と経験させていただきました。当時の高山市長は、六斎が好きで好きで、何かあれば吉祥院六斎を呼んでもらったし、一番前で六斎を見てましたね。そのお陰で色々な場所で六斎を演じさせていただきました。そのお陰もあって「六斎功労賞」を頂いて、都ホテルで開かれた受賞式に出席させていただきました。他の保存会でも後継者問題で悩んでいるようで、行政の力も借りて保存する取り組みをしていきたいし、そのためにも君らも頑張っで継承して欲しい。期待していますよ。

二人 今日ありがとうございます。



美優 続いて、永田文哉さんに伺います。六斎に入ったのは何歳で、その切っ掛けは何ですか。

永田 小学1年生です。切っ掛けは、僕のおじいちゃんが六斎をやっていたのではじめました。

美優 おじいちゃん（永田勲孝氏）の六斎をやっている姿はどうでしたか。

永田 やっぱり太鼓を叩く姿がかっこ良かったことかな。

美優 自分自身が六斎に関わって、六斎に対する印象は変わりましたか。

永田 見ているのと実際に舞台に上がるのとでは違いますね。そう簡単ではないなと思いまし

た。小さい頃は、ビデオを見ながら家でタッパを太鼓代わりにして叩くまねをして、自分が舞台上で演じるとなると難しく感じました。簡単な気持ちで舞台上に上がれないなと思いました。

美優 子どもの頃は何が一番大変でしたか。

永田 四ツ太鼓でも打ち方があるし、テンテン、トコトコという曲もなかなか覚えられなかったりしたので難しかったです。

美優 六斎をやめようと思ったことはなかったですか。

永田 教え方が少しきつく感じることはありましたし、そんなときはやめたいと思いましたね。

美優 でもこれまで続けてこられたのは何だと思えますか。

永田 明確ではないけども、子どもなりに伝統芸能を守るという気持ちが何処かにあったのかも知れませんね。だからずっと続けているのかもしれない。

美優 六斎を続けてきて良かったなと思うところは何か。

永田 今になって思うことは、舞台上に上がって演じることで、自分自身の自信に繋がっているように思います。

美優 4月から新社会人（京都市職員）ですが、これからも六斎は続けていこうと思えますか？

永田 そうですね。出来る限り参加をしたいという気持ちは強いです。

美優 私たちの頃と違って、子ども六斎会に参加する子どもが少なくなっていますが。

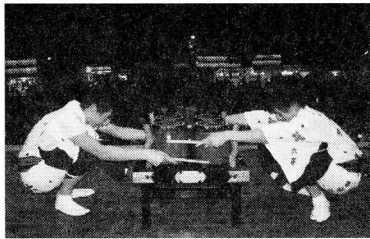
永田 小学校や中学校の先生方が練習会に参加や指導がなくなったことで寂しく感じるし、小・中学の先生方が参加してもらうのは、どうしたらいいのかと思うこともあります。

美優 どうしたらいいと思えますか（笑）。学校の先生方が来なくなったのは大きいと思います。これから研究会が子どもたちの指導者的な立場になると思うのですが、この研究会で何かしたいと思うことはありますか。

永田 昔は学習センターがあって、そこに集まれる環境があったけども、これからは研究会などの活動にいろいろな地域の人たちや、子どもたちが集まって来られたらいいなと思います。

美優 太鼓以外に獅子とか岩見重太郎などをやりたいなと思えますか？

永田 もちろん
んすべてが演
じられること
は必要と思っ
てるけども、
獅子などの芸



能より、やっぱり僕は太鼓や鉦の方が好きなので、もっと演目を増やしたいと思います。でも機会を見つけて他もやってみたいという気持ちもないこともないです。

美優 太鼓の演目を増やすために何かしていることはありますか。

永田 DVDを良く見ます。難しい太鼓になると画像だけでは覚えられないですね。以前山田均さんに教えていただきましたが、実際に教えてもらわないと分からないですね。

美優 そのためにも保存会と子ども六斎と一緒に練習出来たらいいと思いますが、一緒に練習すれば色々なことが見て覚えられるので合同の練習会が必要ですね。

永田 それは一緒に練習出来るならその方がいいと思います。その中で得意なものを伸ばせて行けばいいし、もちろん全部が出来るのが理想ですね。白ハリの変わるタイミングや打つ間合いが分かるので、得意分野も伸ばしやすしいし、色々なことが出来る方がいいと思いますね。

美優 吉祥院六斎でも後継者の育成が必要ですが、何を伝えればいいと思いますか。

永田 六斎の演目だけを伝えるのではなく、周りの人たちとのつながりも一緒に継承してきているものもあるので、周りの人たちの協力や思いも伝えていく必要があると思います。

美優 六斎や地域の人たちとのつながりを残すためには何が大切だと思いますか。

永田 六斎を知ってもらうことが一番大事だと思います。研究会が発行している「獅子の如く」で六斎をもっと知ってもらうことも必要やと思います。知ってもらわないと忘れられてしまうので、特に民俗芸能などは衰退してしまうので一番怖いと思います。保存会としては、子どもたちに技術を伝承しなければならないし、天満宮に出演することが知ってもらうことにつながるし、研究会の活動でそ

れをみんなに知ってもらうという活動が必要だと思います。

美優 次の世代に技術を伝える他に、具体的に何を伝えることが重要だと思いますか。

永田 難しいな。はじめは子どもたちに、舞台上上がって太鼓が上手くなったなどお客さんから拍手をもらって、次はもっと上手に叩けるようになろうと思ってもらうことが大事やと思います。それを続けることで自信になるし、上達していくことにつながると思います。四ツ太鼓からは始める子どもたちが多いけど、獅子やその他に興味を持ってくれると思うし、六斎の歴史とか六斎に関わってきた経過とかが伝えられればいいのかな。

美優 でも大人と一緒に練習していないので、子どもたちは四ツ太鼓しか練習しないし、私たちも色々な物を覚えたいけど、保存会の皆さんが練習に参加していただけないのが残念なんですね。違う質問ですが、六斎で一番難しいと思うのは何ですか。

永田 う～ん何やろ (笑)

美優 もし自分の子どもが出来たら六斎をさせますか。

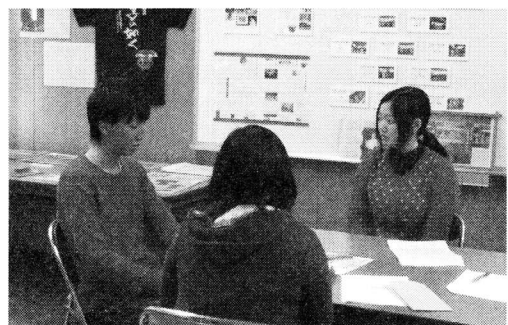
永田 興味があればやって欲しいです。

美優 これからやってみたいことは。

永田 祇園囃子とかやれないものがあるので、太鼓の演目を全部出来るようにしたいです。

美優 六斎を保存するために具体的に何かしたいということはあるですか。

永田 自分が天満宮の舞台で六斎を奉納し、太鼓を叩くことで興味を持ってもらうことが一番だと思うし、今保存会の高齢化もあるので、若い僕たちが継承することで六斎を知ってもらいことですね。地域の伝統芸能を背負う重さや責任を感じているので、そんなことも地域の皆さんに知って欲しいですね。



里紗 最後に、六斎研究会として何かしてみたいことはないですか。

永田 保育所や小学校で子どもたちに六斎を教えたいし、指導などをしたいですね。

二人 今日はありがとうございました。

□ ■ □ ■ □



里紗 続いて、西村一孔さんに六斎の思い出について色々とお伺いしたいと思います。西村さんは、いつ六斎に入会されましたか。

西村 昭和55年に六斎の崩壊の危機があって、町内の青年が入会した時に私も入会しました。私の親父も保存会のメンバーで子どもの頃から興味があったし、天満宮の舞台でも一番いい場所で六斎を見せてくれたからね。

昔の練習場所は小さな集会場で、そこで六斎の真似ごとで遊んでました。昔は六斎も盛んやったしね。六斎をやるなら獅子やと決めました。六斎の中でも花形で華やかなイメージやさかい、獅子に憧れもあったしね。その後、親父が蜘蛛で私が獅子と一緒に舞台を踏んだ経験もあります。自分で言うのも何やけど、若い頃は運動神経抜群でね。身が軽かったんやで(笑)。デビューが天満宮の舞台で、碁盤に上がるのを成功させたしね。年も22歳やさかい一番いい時代やったな。その当時は年間かなりの出演依頼があって、六斎をやっているお陰で色んな舞台を踏ませてもらいました。日本武道館、筑波万博、国立劇場、それと東京三越百貨店のイベントにも出演したな。六斎をしていたから出演できたことで、人生で色んな経験をさせてもらったね。

美優 凄い！

西村 獅子は失敗がはっきりと分かるから怖い。ひっくり返ったら失敗とはっきり分かるんでごまかせない。そやから必至に練習をす

るし、呼吸を合わさな危ない芸や。中でも一番緊張したのがテレビの歌番組「夜のヒットスタジオ」の生放送やった。当時の人気歌手が出演してて、近藤真彦や小泉今日子、キョンキョンが目の前にいるわけや。そらもう緊張するわな。

二人 大爆笑！

西村 生放送で碁盤に上がるんやで。それも2、3分しかないし、全国放送やし、そらもう緊張したな。まあ懐かしい時代やな。私も50歳を越えてるし、若干体力の限界を感じてる。獅子はハードなんで、もう無理やな。特に獅子の前は頭を持つしんどい。木村君と村田君も早く後継者を作って行きたいと考えてるけど、しんどい芸なのでなかなか後継者が見つからへん。獅子が育たないから六斎も自然消滅していくのかなと思うときもありますよ。昔は女性が舞台上上がることが許されへん時代があったけど、今では君らも舞台上上がるようになったし、また、浴衣着て太鼓を叩く姿もええもんやがな。

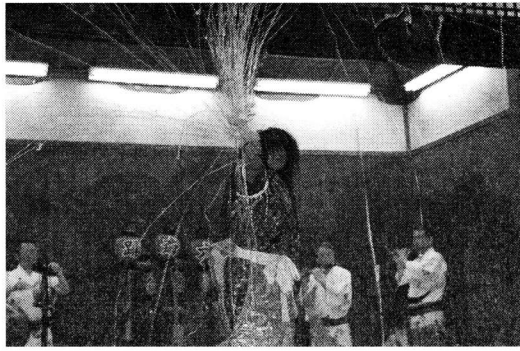
美優 ありがとうございます(笑)

西村 獅子の衣装を着て碁盤で逆立ちするし、ひっくり返ったら相棒に怪我をさせるしね。失敗するのが一番怖い。そのためには、二人で何度も何度も稽古したしな。木村君と村田君の次の後継者が育って欲しいな。

美優 六斎で何を伝えたいですか？

西村 そやな〜あ。演技はもちろんのことやけど、六斎の道具を大事にすることを伝えたいな。出演するときはみんながその道具を運んで、終わったら全員で片付ける。又、自分の道具は自分で管理する。例えば、獅子を担当した人は、準備から後片付けを最後までするというのを次の世代に伝える必要があるね。獅子の衣装は汗臭くなるので、終わったら乾かさんといけないのでね。道具を大事にする気持ちを伝えたいな。演じることや技術だけを継承するのではなくて、先代から受け継いだ六斎の諸道具などを大切にするという気持ちを是非、子どもたちに伝えたいと思います。

美優 昔は道具だけを運ぶ担当の人がおられたのですか？



西村 昔は獅子は花形で、裏方さんが全部準備から後片付けまでしてくれました。獅子はスタミナもいるので、準備から後片付けまで裏方さんがやってくれた時代もあった。でも六斎は一人では出来ないんで、チームワークでやっていかなあかんしね。

美優 六斎はやっぱり残していくべきと思いますか。

西村 そやな。今の親御さんは、獅子をして怪我でもしたらと思うと厳しいけど、やっぱり伝統芸能は残さんとあかんと思う。それと今は勉強していい会社に勤めさせたいと思うのかな。六斎をやる子どもも少なくなってきた。やれやれと言うて出来るものでも無いし、六斎は好きでないと関わっていけないと思うね。私は、獅子専門で、ずっと獅子だけしかしたことがない。獅子に対する思いは人一倍あるので、何とか次の世代を育てたいと思ってる。

里紗 今の子どもたちに何か求めるとしたら何かありますか。

西村 石田さんらが六斎を盛り上げようというろいろと取り組んでくれて有り難いと思う。でも肝心の技術の伝承が今一つ盛り上げられないのが現状やな。特に獅子が育ってない。今も一人が欠けると獅子が出来ない状態やし、天満宮に六斎奉納が出演が出来なくなりますしね。獅子の二人も30歳やし、早く獅子の後継者を作っていかないとね。又、蜘蛛の糸を作るのにもかなりの技術が必要で、今は恥ずかしい話、他の保存会にお金を出して作ってもらってるのが現状ですわ。一回の演目で蜘蛛の糸が五個セットが必要で、昔は私の親父が作っていたけど、親父の代で途切れてしまった。天満宮の六斎奉納を毎年見ている人から、

「今の六斎は物足りない」という声もあがっているのも事実やさかいね。私も責任を感じていますが、やっぱり獅子を継承するための取り組みが急務やと思います。

美優 ありがとうございました。



美優 続いて、吉祥院六斎保存会会長の木村俊典さんに伺います。現在、保存会会員の人数は何名ですか。

木村 現在15名が登録しています。昔は30数名いて活気がありましたからね。会員の3分の2が70歳以上になりました。たまに出演の依頼をいただきますが、人数が揃わない場合でお断りする場合もあります。やれる演目も段々少なくなってきました。一人欠けたら出来ないものもあるので非常に厳しい状況です。人数は揃っても下手な六斎は見せられないというプライドがありますしね。昔は出演依頼もかなり多かったけど、今は少なくなりました。後継者不足が大問題で、30代、40代の中間世代が少ない。子どもと70歳代の会員だけしかいない状況です。

美優 これまで保存会に加入していて、体力的な理由や病気などで、引退されておられる会員の方々は、その後、保存会会員ではなくなるわけですが、長い間、六斎を守り育ててきた「功労者」でもあるので、何かの形で六斎の保存協力をしていただけることは必要と思うのですが、何かお考えはありますか。

木村 昔やっていた方にもう一度協力していただくとか、また、高齢で六斎は出来ないけども、六斎資料室を通して、地元に伝えるとか、六斎の活性化に向けて協力を要請したいと考えています。



長年保存活動をしていただいた功労者です。後継者の指導にあたっていただくとか、子ども六斎の指導員になって頂くとか色々な協力をしていただきたいと思います。

美優 子ども六斎会の練習と大人の練習会を一緒にするという事は出来ないのですか。

木村 一緒に練習会をしたいですね。一緒にすることで子どもたちも見て覚えたり出来るので一緒に出来る練習会を考えてみます。子どもだけやと遊んでる時間の方が長いときもあるから、大人の人があると緊張感を持って短時間でも練習する環境になると思うので一度考えて見ます。

美優 笛だけの練習会を取り組んでも面白いかもかもしれませんね。

木村 他の保存会では、笛だけの練習日とか鉦だけを教える練習会をやっているところもあるそうやしね。

美優 山田均さんもおっしゃってましたけど、笛を吹くのが難しいし、笛がいなくなると保存会もつぶれるとおっしゃってました。

木村 笛が吹けたらどこでも連れて行けるしね。出来れば何でも出来る人が育ててくれればいいんやけどね。西片大悟も中学校の取り組みで獅子を披露するために獅子の練習してたけど、それを切っ掛けにして本格的に練習してくれれば嬉しいんやけどね。会員の高齢化で危機的な状況にあるんで、練習方法を考えんとあかん。笛とか鉦を中心に練習する時間をつくるとかも含めて考えな駄目やな。

美優 これから六斎を残すためには運営体制はどのような形になりますか。大ちゃん（村田大輔さん）も天満宮の舞台上で六斎や研究会の活動をアピールしてくれているけど、地道に六斎を知ってもらうことが必要だし、加



入りたいという人がどこに言えば加入できるのかもわからない。入会したいという人が分かりやすい方法を考えるなどのPR活動もやっていかないと駄目だと思います。

木村 NPO法人ふれあい吉祥院ネットワークが「子ども六斎体験教室」を取り組んでいただき、数人の子どもが入会してくれました。その子たちをしっかりと育てたいと考えています。研究会でも、美優や里紗が六斎の歴史的意義も地元や学校に伝えてくれてますが、今後も色んなところで六斎をアピールして欲しいと思います。六斎保存会は、子ども六斎会の練習に参加するなどして、保存会としてやれることをやって行きたいと思います。洛南中学校の先生も大変熱心に練習を見に来ていただいていますし、吉祥院小学校でも六斎の歴史を学ぶ授業を設けていただき、石田代表がそうした授業に出てくれたり、その他にも講演会で六斎をPRしていただいています。今後も吉祥院地域の伝統文化財を子どもたちの教育につなげて欲しいですね。

里紗 本当ですね。研究会として私たちの出来ることから始めて行きたいと思います。保存会の皆さんも子ども六斎の練習に来ていただけたら子どもたちも本当にお喜ぶと思います。

美優 応援して欲しいです。子どもたちも緊張感を持って練習しますから。

木村 山田均さんの息子の公亮も笛が吹けるようになったしね。やっぱり親父のDNAを引き継いでるんやな。均さんも全く教えてないと言うしね。画像を見てるうちに吹けるようになったと言うから。見よう見まねで出来るものでもないのに凄いわ。研究会のメンバーにも入ってくれたからね。これから頼もしい。

美優 研究会としては、六斎の歴史的意義を広く地元を広げていくしかないと思うし、六斎保存会は技術的な伝承をしっかり子どもたちに伝えて、保存会と研究会がやれることをはっきりと分けていけばいいと思います。

木村 NPOや小学校、中学校、地域の方々に協力をお願いしたいと思います。

二人 どうもありがとうございました。



清水美優獅子の如く編集部



インタビューに応じて頂いたみなさん、ありがとうございました。今回のインタビューを通して六齋を改めて見直すことができました。六齋が今吉祥院で存在していることの意味を感じ、また、

これからも守っていかなければならないと言うことが、私たちの一番の課題であり、必要なことなのだと実感しました。

西片里紗／獅子の如く編集部



六齋に対する想いや、歴史を知る度に六齋は絶対に絶やすわけにはいかないと改めて感じました。過去の苦労があるからこそ、今の六齋があり、私

たちが六齋に関われるのだから、私たちが終わらせる訳にはいかないと痛感しました。六齋に関わる人たちだけでなく、地域全体のものだとも感じました。特に、子ども六齋は、地域の応援があつてのものだと思います。地域の人には、六齋を見たことはあつても、詳しく知っているという人は少ないと思うので、六齋のことをもっともっと知ってもらいたいと思います。

保存会の皆様方、貴重なお話しをお聞かせいただき、本当にありがとうございました。



千年以上伝承された吉祥院六齋念仏踊りは、その歴史の中で幾度も困難に直面しながら、不屈の精神で乗り越え、子どもたちに脈々と受け継がれてきた伝統の技と心を、今後どのように伝承していくのかが大きな課題になります。六齋保存活動には、技術的な伝承と地域の伝統芸能に対する誇りなど、子どもたちに継承していかなければならないことを再認識いたしました。六齋の保存活動を通して、子どもたちを取り込んだ地域コミュニティのあり方が大きな人間関係をつくり、人間教育の場となるのではないかと考えています。

今後とも保存会の皆様方をはじめ、関係団体のご支援並びにご指導をいただきますようお願い申し上げます。

石田房一／獅子の如く代表

